妖精社
僕がエネマグラで、
女装マゾ奴隷に堕ちた経緯。

第1章

『椛！』
別の部屋から、椛の母の叫ぶ声が聞こえる。
椛は思った。
うるさいな。放っておいてくれよ、と。
だが、無視を続ければ続けるほど、椛の母の声は激化していく。
仕方なしに少しドアを開け、廊下の様子を確認する。
すると、椛の母と視線がかち合った。
しかし、椛の存在に気付いたはずなのに、椛のいる部屋を素通りして忙しそうにしている。
椛の母は、その後も何かをまくし立てるように喋ってから、家から出て行った。
いつもそうだ。
椛の母は、自分の思い通りに事が進まないと気が済まない性質で、過保護なまでに干渉してくる。そのくせ、椛から歩み寄ろうとすると、シャットアウトするのだ。
よく、椛に大丈夫なの？と問う椛の母だが、椛を心配しているのは表面だけで、心の中では手を焼かせる煩わしい存在なのだと思っているのかもしれない。
そう思うと、椛はイラついてしょうがなかった。
自分の親指の爪をがじがじと噛むクセのお蔭で、それは少しは軽減されたが、親指の爪がガタガタにすり減ると、また治まりかけていた嫌な気分が再発してくる。
そんな時は最終的な手段として、ゲームのコントローラーを手にするのである。
ゲーム機の電源ボタンを押すと、暫くしてＴＶ画面に女の子が映る。
コーヒーにミルクを入れたような髪色で、目は少し釣り目。
そんなキャラクターが椛を見つめている。
椛はでれっとした。自然と鼻の下が伸びてしまう。
一日一回以上は、椛はこうやってゲームをするのが日課だ。
また、根っからのオタク気質であった椛は、小さい頃からフィギュアを収集したり、壁にポスターを貼ったりするのも大好きであった。
他人に迷惑を掛けるような趣味では無かったが、学校での話が合わないという弊害があった。
ある日、親友と思っていた友達にそれを告げてしまってからというもの、陰口を叩かれるようになってしまったのだ。
陰口だけならまだ我慢が出来るが、トイレに連れ込まれ、暴力を振るわれる日さえある。
そんな訳あってか、椛は学校に行かずに、引き篭もる日が続いている。
不意に扉がノックされる。
「こんにちはー！」
椛はびくりと身体を揺らす。
学校の男友達かと思ったのである。
だが、扉を開けて入ってきたのは、女の人だった。

彼女の顔を凝視する。
入ってきた人物は女の人だとは思えないぐらい高身長である。
肩幅も結構ガッシリしており、華奢な体つきの椛とは、相反するような感じだった。
「……だ、誰ですか？」
「ボクは、遥。バレーボールの選手で、心の友の会、というボランティア団体に所属してるんだ」
「バレーボールの選手？　しかも、ボランティア団体の方って……俺に何の用ですか？」
「キミのお母さんから、キミが学校へ行きたいと思わせるようにして欲しい、って託っているんだよ」
偶然にも、先程ゲームをしていた、ゲームの中に登場する女の子のような容姿に、ドギマギしてしまう。
けれど、この部屋は椛の城のようなものである。
不用意に入られたら、狼藉ものとして追い出さなくては――。
「あの、そんなこと、俺は頼んじゃいないです！　出て行ってください！！」
「外に出て、たくさんの人と会話すると、心も晴れやかになるよ？」
「俺は、現状に満足しているんです。勝手な思想を押し付けないでください！！」
自分の部屋に女の人を入れるなんて、椛の母を除けば初めてだ。
椛は緊張してしまう自分を隠せずに、拒絶の言葉を吐いた。
「引き篭もりの人達は、み～んな大体同じような事を言うんだよね」
「……え？」
「そんなの必要無い……ってさ」
遥の瞳がじぃっと椛を捉えて離さない。
「でもね、必要の無いことなんて、一つも無いんだよ」
遥の言葉が、妙に椛の心に響く。
説教でも続くのだろうか。
椛の脳裏にそんな疑問が首をもたげた時だった。
急に椛の腕が、遥に掴まれる。
気付けば、椛はカーペットの上に仰向けに倒されているではないか。
「何するんですか！？」
「椛が外に出たいって思うようにするのさ♪」
なんと強い力だろう。
上から圧し掛かるようにされ、椛は息苦しさに顔を歪めた。
ジタバタともがくが、一向に拘束が振り解けない。
「ちょ、ちょっとやめてくださ……」
ジーンズとトランクスを神業のような速さで脱がされてしまい、下半身がスースーする。
椛は自らの性器が露わになったことを恥じて、両手で隠す。

顔に似合わず標準サイズのそれは、女性に見られたことで少しだけ反応を示した。
「これをしてもらうよ」
遥にそう言われて顔を上げると、遥の手には何かが握られている。
ガラスで出来た大きな注射器のようなもので、椛には今から何をされるのか、いまいちピンとこなかった。
「何ですか、それ……？」
「ガラス浣腸器だよ。これをお尻に注射するのさ」
「そ、そんな！　嫌ですっ、やめてください！！」
「ふふっ、やめてって言われても、やめないけどね」
ずぶりっ
本当にそんな音がした気がした。
「ぎゃひぃぃ！！」
急にお尻に異物を挿れられて、椛は叫ぶ。
「だ、誰か、助けて！！」
大声を出したつもりなのに、思ったよりも声は出なかった。
しかも、椛の住んでいる家は、隣家と隣家がかなり離れている。
助けを呼んでも誰も来てはくれないだろう。絶望的だ。
「いい？　重要なことを言うから、よーく聞いて」
遥が椛の目の前で人差し指をピンと立てる。
お尻に入っている浣腸器の異物感が半端無い。
椛は観念したように、頷いた。
「今から１本が１０００ＣＣあるこの浣腸器の液体を、２本キミのお尻に挿れるよ」
「えっ、２リットルも！？」
椛は２リットル用のペットボトルを思い浮かべる。
あんなに大量の水分が、お尻から入るはずが無い。椛は思った。
「そんな真っ青にならなくても大丈夫だよ。液体を注入する時は、少し苦しいかもしれないけどね」
遥があっさりと言う。
「じゃあ、ゆっくりと挿れていくよ？」
そう発言した後、椛のお尻に液体が注入されていった。
「んぁ……はぁぁ……」
冷たい液体がお尻の中に入っていくのが、感覚で分かった椛は、堪らず声を漏らす。
苦しい。どんどん注入されていく感触に、眉を寄せて耐える。
そうこうしている内に２本目に突入した。
「あ、そうそう。浣腸が終わったら、出すのを我慢してね」
軽い感じで、付け足すように遥が言う。

次第に、膨れ上がるお腹。気を抜くと、お尻の穴が緩みそうになってくる。
ちゅぽん、という音を立てて、浣腸器が抜かれる。
椛は慌てて、お尻の穴に力を入れた。
「椛は、どれだけ耐えられるかな？」
遥がにぃっと、口元を歪曲させる。
高みの見物でもするかのように、うつ伏せになっている椛を見下ろしながら、両腕を組んでいる。
椛は、恥ずかしそうに縮み上がった陰茎を隠し、お尻の筋肉に力を入れることに集中する。
「い～ち、にぃ～い、さ～ん……」
今の状況を面白がるように、遥が手を叩いて、秒数まで数え始めた。
時折、ぎゅるるるる、とお腹から変な音が聞こえる。
我慢を続ける椛の額からは、冷汗が止まらない。
後、３秒ほどで、３０秒経つという時だった。
「も、もう無理です！！」
すくっと立ち上がると、トイレに駆け込む椛。
ぶぴゅっ❤びゅー❤ぶじゅ❤ぶぱっ❤
トイレに入ると、極限まで我慢していたアナルから、大量の液体が噴射する。
それはすぐには終わることがなく、立て続けに排泄することになった。
腹痛は徐々に治まっていく。しかし、においが酷い。
腸の中にあったものは全部流れ出て、スッキリしたものの、椛をこんな目に遭わした相手に腹が立ってきた。
「ちょっと！　一体どういうつもりなん……」
文句の一つでも言ってやりたい。
そう思ってトイレから戻ったのに、気付けばまたもや、遥に組み敷かれていた。
「離してくださいっ……！」
「引き篭もりはやめて外に出る、って約束してくれたら、離してあげるよ」
「嫌ですっ……そんな約束したくありませんっ！」
「ふーん、ボクに逆らうんだ？」
ちろりと椛に視線を投げやって、遥が椛の耳元で囁く。
こめかみから汗が伝う。嫌な予感しかしない。
「……じゃあ、ボクに逆らえないように、キミを調教してあげる」
「ちょ、調教……？」
怪しげな言葉に、びびってしまう椛を尻目に、遥は自分の持ってきていたバッグの中から、何かしらの容器を取り出していた。
そして、組み敷いていた椛をうつ伏せにさせ、背中に跨いで座った。
これでは、逃げる隙さえ無い。

椛は、少し悔しげに遥を睨んだ。
「女に力でねじ伏せられるのが、嫌？」
遥の問いに、椛が黙り込む。図星だった。
遥がニマニマする。椛の表情からそれが読み取れてしまったようである。
「……でも、そんな気分もこの後、きっと吹っ飛んじゃうよ」
「……ひゃぅっ……！？」
椛は、唐突に訪れた冷たさに、身体をびくりと揺らす。
見ると、椛の臀部に透明な液体が塗りたくられている。
「冷たい？　ローションだよ。すぐに体温で温められて、気にならなくなるからね」
とろっとした感触が椛のお尻で滑る。
その後、遥の指が椛の尻穴辺りを行ったり来たりし始める。
「あふっ……っ！？」
思わず漏れた吐息が恥ずかしくて、両手で口元を覆う椛。
それを見た遥が、口元を覆っていた椛の両手を外した。
「恥ずかしがってるんじゃないよ！　メス豚が！！」
「……メ、メス豚？」
急に遥の声色が変わって、椛は青褪める。
「キミはもう家畜同然の存在なんだよ。ボクのメス豚ちゃん❤」
「……っはぅ！？」
何度も行き来を繰り返すだけだった遥の指が、突然、椛の肛門に入る。
にゅる❤にゅちっにゅちっ❤
人差し指の第一関節まで挿れたかと思うと、折り曲げたり、出したり挿れたりされる。
「う、ぅ、ぁ、ぁあ……」
痛みはさほど無いものの、挿れられている違和感は拭えない。
自分でもじっくり触れたことが無いトコロに、遥の指が侵入している。
その事実に、椛は顔を背けたくなる。
けれど、今自分がどんな状況に置かれているのかを確かめたくて、遥のする行為の全貌を見てしまう。
「どう？　恥ずかしいだけ？　気持ちよくない？」
遥が尻穴の皺を、一つ一つ伸ばすように、丹念に指で撫でる。
「気持ちよくなんて、なりませんよっ！」
反射的に叫ぶと、遥が再度ローションの容器を手に取った。
「んじゃ、ローション追加してから、あそこを狙ってみようかな♪」
あそこ……？
遥の言っている部位がどこを指しているのかわからない。
椛はまた置いてけぼりをされている気分だ。

ローションが増やされて、先程よりもスムーズに指が出し挿れされる。
「っ……ぁ……ん……ひゃぁぁぁあ！？」
ある一点に遥の指が掠めた瞬間、椛の身体に電流のようなものが走った。びくりと身体が揺れる。
「椛のイイトコロ、見〜っけ♪」
「……ッ……なにをしたんですか、一体！？」
「秘密❤　ここを弄ると、気持ちイイでしょ？」
「んくぅっ……は、はいぃ……」
何度も同じポイントを擦られて、椛は涙を流しながら頷いていた。
あまりの気持ちの良さに、意識を委ねようとしたら、急に指が引き抜かれる。
「ど、どうして……？」
尻穴がひくつく。
このまま快楽を与えてくれるものだと思っていたのに、思い通りにしてもらえなくて、落胆してしまう椛がいた。
「ふふっ、今度は、こっちだよ」
遥は自分のバッグを漁ると、得体の知れない物を取り出してきた。
それは、白く流線型で、奇妙な形をしている。
取っ手があるところを見ると、まるで蝋燭を立てた燭台のようにも見えた。
こんなもの、見たことがない。
顔を向けるほど関心を示して、まじまじと見つめる椛。
「これ、なんていうものか知りたい？」
思わず首を振るう。
形状が面白いので、少し興味はあったが、興味の無いフリをした。
遥はそんな椛の様子を見て、クスリと笑う。
「じゃあ、明日ボクが来るまでに興味が出たら、自分で調べてみるんだね」
言って、遥がそれにもローションを垂らし始める。
指を抜いた代わりに、今度はその不思議な物を、尻穴へ埋める遥。
「……うぅっ……」
指よりも太いので、異物感が更に増す。
「念入りに解したから、痛くはないでしょ？」
遥の言う通りである。お尻に物が入っている、という違和感はあったが、痛みだけは感じなかった。
「それでね、キミのよがった顔がまた見たいんだけど……」
「んっ、ぅ、ひぐっ……ぁ、ぁあ、あああぁぁ！！？」
またもや先程と同じトコロを探られて、叫んでしまう。
「ふふっ、そんなに喘いじゃって……。そんなに良かったんだ？」

遥がにやにやしている。
遥の言うように、その『イイトコロ』とやらに棒の部分が当たると、あられもない声が漏れてしまうようだ。
椛が急激な刺激に息を整える。
「っ！？　ぁあん……あぁん！」
すると、唐突に訪れた台風の渦に巻き込まれるような快感。
尻穴が収縮を繰り返し、次第に大きな嬌声が漏れる。
まるで女のような喘ぎをしてしまい、椛は顔を赤く染めた。
ひくんっひくんっと、お尻が疼く。
「動かすのをやめてぇっ、やめてくださいぃぃ……！！」
「ボクは動かしてないよ？　動かしてるのは、キミ自身❤」
そう言われて、股の間を見ると、言葉通り遥は例の物に触れてはいなかった。
「な、なんでぇ……？」
「この道具はね、電源は付いて無いの。腸の動きに合わせて、外部の突起が急所を刺激するのよ」
だから、こんなにもグニグニとした奇妙な刺激を受けるのであろう。
遥から説明を受け、椛は自然と納得する。
「あっん……あぅん……きもひぃぃぃ！！」
誰にも触れられていないのに、お尻は熱くなっていく。
「もっとぉ……もっとぉ……あはぁぁん！！」
背後から犯されているような気分になり、もっと犯して欲しいと腰を揺らしてしまう椛。
「メス穴気持ちいい？　キミ、男の子なの？　女の子なの？」
「メス穴きもちいぃですぅぅ！！　椛、女の子になっちゃったんですぅぅ！！　卑しい俺の痴態を見てくだしゃいぃぃ！！」
思考回路も躰も、湯せんで溶かしたチョコレートのように、とろっとろに蕩けるような感覚に陥っている椛に、遥が言った。
「じゃあ、そろそろボクはお暇するね」
「えっ！？……あんんっ……あふんっ……」
「続きは、また明日してあげる。……あ、そうそう。この快感は数時間は持続するから、後は一人で愉しんでね」
遥は含み笑いをして帰って行った。
『その道具を使い終わったら、明日ボクが来るまで使わないこと』という言葉を残して――。
翌日、椛は遥が来るのが待ちきれずに、アナニーをしてしまった。
もちろん、遥が持って来た道具は使っていない。
自分で自分のお尻の穴に、指を挿れたのだ。

背徳感が椛の身に押し寄せてきたが、昨日受けた快楽が忘れられずに、してしまったのである。
そこまで詳しい知識は無かったが、遥にされたように自分が気持ち良いと思う部分を探した。
しかし、思ったように快楽は得られなくて、椛は肩を落とす。
やはり、『例の物』を使わなければ、同じような快感は得られないのだろうか。
唾液をごくりと嚥下する。椛の視線がＰＣへと向かっていた。
数時間後、遥はやってきた。
「お利口さんにしてた？」
頭を撫でられ、飼い犬のような気分になる椛。
これからエロいことをされるかと思うと、興奮が抑えられない。
「エ、エネマグラを挿れてくだひゃいぃ！！」
我慢しきれなくなった椛は叫んでいた。
「名称を自分で調べたんだね❤　ドスケベちゃん❤」
遥が妖しい笑みを浮かべる。
「どこに挿れて欲しいの？」
「俺の、お尻の穴に……」
「椛は、女の子なんだから、『私』って言わなきゃ駄目よ。それに、お尻の穴じゃなくて、オマンコでしょ！」
「わ、私のオマンコにエネマグラを挿れてくだしゃいぃ！！」
「いいよ。挿れてあげる❤　さぁ、こっちにいらっしゃい❤」
椛の尻穴は、ぐっしょり濡れている。アナルはぱくぱくと口を開き、分泌液が出ている。
その様子は、さながら女が愛液で濡らした、準備万端の膣口のようである。
「椛のメス穴が涎を垂らしているわよ♪　ほらっ、今から挿れるわよ、挿れるわよっ、力を抜いて❤」
「ひゃいぃぃ❤　おぅっ、んっ……入ってくぅぅぅう！！」
それから数日間、遥にエネマグラ調教をされた椛は、その快楽に病み付きになっていた。
「ボクのマゾメイドになったら、もっとすごいのを入れてあげる」
遥が言う。椛のお尻には、いつものようにエネマグラが装着されている。
どう見ても異質だが、当たり前の光景になっていた。
「なるぅう！　ならせてくださいぃぃ！」
一も二もなく、椛は叫ぶ。
当初は恥ずかしがっていた椛も、遥からの調教を受ける内に、その快楽を欲するようになっていた。
「それじゃあ、キミに似合うメイド服を買いに出かけるわよ」
「はいっ……！」

遥の声に受け答え、隷属する。
外に出たのは、どれぐらいぶりだろう。
太陽の光を浴びて、眩しそうに目を細める。
「何してるの？　置いていくわよ？」
椛の前を歩く遥に後れを取らないよう、椛は歩き出した。

体験版はここまでです。
残りは本編でお楽しみ下さい。